

【原著論文】

## スポーツ施設利用者のスポーツ行動に関する一考察

阿部 征大<sup>1)2)</sup>, 清宮 孝文<sup>1)</sup>, 依田 充代<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 日本体育大学博士後期課程

<sup>2)</sup> 神戸医療福祉大学

<sup>3)</sup> 日本体育大学体育・スポーツ科学系

### A study on the sports behavior of sports facility users

ABE Yukihiko, KIYOMIYA Takafumi, YODA Mitsuyo

**Abstract:** The purpose of this study was to present a method of sports facility management by structuralizing the sports behavior of sports facility users and examining whether their behavior changes depending on their attributes. A questionnaire survey was conducted on 1156 sports facility users, and 396 people who answered all questionnaire items appropriately were included in the analysis.

The findings of this study can be summarized as follows:

- (1) A factor analysis of the sports behavior of sports facility users derived five factors: "trendiness," "satisfaction with community life," "spectator sports," "individualization," and "continuation of exercise and sports."
- (2) "Continuation of exercise and sports" had the highest factor score, followed by "satisfaction with community life," while "trendiness" had the lowest factor score.
- (3) Comparisons of the factors and gender revealed that men had significantly higher values in "spectator sports" and "individualization" than women.
- (4) Comparisons of the factors with age revealed that subjects in their "30s or younger" had significantly higher values in "individualization" than those in their "40s or older."
- (5) In terms of the purpose of using sports facilities, the highest values were found in the following order: "physical fitness and health," "overcoming physical inactivity," "enjoyment and distraction," "beauty and overcoming obesity," "interaction with family," "improvement of personal records and abilities," "interaction with friends and peers," and "spiritual cultivation."

**要旨:** 本研究はスポーツ施設利用者のスポーツ行動の構造化を試みた。さらに、スポーツ行動は属性によって変化が生じるのか検証するため属性比較を実施しスポーツ施設マネジメント手法の一助を目指すことを目的とした。調査対象者は、スポーツ施設利用者1156名を対象に質問紙調査を実施し、質問紙に誤答や無回答が無かった396名を分析対象とした。

分析の結果、本研究で明らかとなったことは以下に集約される。

- (1) スポーツ施設利用者のスポーツ行動について因子分析した結果、「流行志向」「地域生活満足」「みるスポーツ」「個性化」「運動・スポーツ継続」の5因子が抽出された。
- (2) 因子得点で最も高い値を示したのは、「運動・スポーツ継続」であり、次いで「地域生活満足」であった。最も低い値を示したのは「流行志向」であった。
- (3) 因子と性別を比較した結果、「男性」が「女性」より「みるスポーツ」「個性化」の因子において有意に高い値を示した。
- (4) 因子と年代を比較した結果、「30代以下」が「40代以上」より「個性化」の因子において有意に高い値を示した。
- (5) スポーツ施設を利用する目的は、「体力・健康づくり」「運動不足の解消」「楽しみ・気晴らし」「美容や肥満の解消」「家族とのふれあい」「自己の記録や能力の向上」「友人・仲間との交流」「精神修養」の順に高い値を示した。

(Received: April 12, 2021 Accepted: June 14, 2021)

**Key words:** sports facilities, facility management, exploratory factor analysis

キーワード：スポーツ施設, 施設マネジメント, 探索的因子分析

## 1. 緒 言

スポーツ庁の体育・スポーツ施設現況調査（2018）によると、体育・スポーツ施設設置数は、187,184箇所あり、学校体育・スポーツ施設60.4%、公共スポーツ施設27.6%、民間スポーツ施設8.8%、大学・高専体育施設3.3%という結果である。施設数は、1996年以降継続して減少しており、主に学校体育・スポーツ施設及び公共スポーツ施設が減少している。その原因は学校の統廃合や施設の老朽化、公共社会教育施設に附帯するスポーツ施設の減少が挙げられている。また、運動・スポーツの実施場所や利用施設について報告されているスポーツ・ライフ・データ（2018）では、全21項目中、道路50.3%が最も高く、次いで、自宅（庭・室内等）23.9%、体育館20.0%である。運動・スポーツの実施場所は、道路や自宅で実施している傾向が高い値を示しているが、施設を利用し運動・スポーツを実施しているのは全21項目中半数以上を占め、スポーツ実施形態は近年多様化していることが伺える。

スポーツ基本法（2013）の基本理念では、「国民が生涯にわたりあらゆる機会とあらゆる場所において、自主的かつ自律的にその適性及び健康状態に応じて行うことができるようにすることを旨として、推進されなければならない」とされ、スポーツ施設の整備等に関する基本的施策において、「国及び地方公共団体は、国民が身近にスポーツに親しむことができるようにするとともに、競技水準の向上を図ることができるよう、スポーツ施設（スポーツの設備を含む。以下同じ。）の整備、利用者の需要に応じたスポーツ施設の運用の改善、スポーツ施設への指導者等の配置その他の必要な施策を講ずるよう努めなければならない」と定められている。2017年に策定された、第2期スポーツ基本計画において、スポーツを「する」「みる」「ささえる」という視点からスポーツ参画人口の拡大を目指し、そのためにも人材育成・場の充実が欠かせないとされている。さらに、スポーツ庁（2018）のスポーツ実施率向上のための行動計画によると、「約2000万人が新たにスポーツに親しむ必要があること、一人一人がこれまでのスポーツの捉え方を変えていくとともに、スポーツに取り組むきっかけを得やすい環境を整えることが必要である」と明記されている。このことからスポーツを文化として構築させるうえでスポーツ施設の重要性が伺える。しかし、上述したように運動・スポーツの実施場所は道路・自宅（庭・室内等）等のスポーツ施設ではない場所が大半を占めている現状がある。スポーツ施設の整備や充実を検討していくためには、スポーツ施設に焦点をあて、なかでも公共スポーツ施設利用者のスポーツ行動に適した視点が重要である。

スポーツ施設研究の動向は、スポーツ施設に対する満足・不満足や要望の有無が施設利用者の行動に影響を与えているのではないかと推察し、満足・要望の観点から公共スポーツ施設の改善点や利用者の満足、要望・期待の因子構造を明らかとし構成因子間の相互関係を検討されている（中ら、1993）。さらに、公共温水プールの活動状況を設置者側と利用者側から調査し、促進課題や今後の方向性の検討を目的とした研究（石井・石川、2000）、公共スポーツ施設の常連利用者に焦点を当てている研究（中澤、2006）が挙げられ、公共スポーツ施設の利用者の視点から満足度に注目している研究も多く行われている（神野ら、2009；北見ら、2011；秋吉・山口、2013；福田ら、2015）。また、2003年に指定管理者制度の導入に伴い制度の導入過程における問題点を明らかにしている研究（天野、2005）や社会的意義に着目した研究（後藤、2008）がある。公共スポーツ施設利用者の生活様式に着目した研究（阿部、2021）では、運動やスポーツに対する調査項目が少なく運動・スポーツの視点から検討する必要性も課題として挙げられる。このように、近年のスポーツ施設研究は公共施設に着目した研究が多く報告され、利用者視点の満足度や要望、指定管理者制度関連に留まっている。さらに、運動・スポーツという視点から課題が挙げられていることから公共スポーツ施設に着目する意義があると考えられる。さらに、運動・スポーツの観点では、運動者行動変容ステージとインセンティブの内容により運動行動の動機づけが異なるか検討した松下ら（2014）は、運動行動を動機づける強さは、インセンティブの内容や運動の行動変容ステージによって異なることを明らかとしている。細江（1982）は、「よく似た運動行動をとる運動者は、同じようなスポーツ活動を好む傾向があり、よく似た運動行動をとる運動者にとともに好まれるスポーツ活動は、よく似た特性をもつものである」と仮説立て、特徴的なスタイルを持つ運動者群に分類できることを実証した。さらに分類した運動者群は、似かよったスポーツ活動を反映しており、共通した特性がみられることを明らかとしている。これらのことから、より詳細な情報を得るために、似かよった運動者の特性を把握する必要があり、本研究では公共スポーツ施設利用者のスポーツ行動について着目する。

文化としてスポーツの価値が有益に働くためには、「スポーツを実際に行ったり、みたりするといったスポーツ行動（スポーツ実践）が生まれなければならない」とされ、スポーツ行動が成立するための条件は「スポーツを行う人自身の条件」「生活や社会の条件」「スポーツの条件」「スポーツに関わる環境条件」の4つに整理され、スポーツを行う人自身や社会の力で整える

条件が挙げられている。この4つの条件がスポーツ行動の成立・維持・発展にも欠かせないものである。また、スポーツ行動が成立するためには、スポーツを行う場や機会に運動者が接近しなければいけない(八代・中村, 2002)。さらに、八代ら(1981)は、「人々が運動や体育・スポーツ事業に対してとる行動(運動者行動)の成立や維持をめぐるしくみを明らかにすることは、体育経営学分野では、運動者行動の研究として、これまでに強い関心がよせられてきている」と述べている。その後の運動・スポーツ行動研究では、畑ら(1984)は、有効なサービスを導き出すため、運動・スポーツ行動に対する主体的要因から類型化を図り「運動学習の特性」「スポーツによる人間形成」「スポーツの快適さ」の3つを抽出し、運動・スポーツに対する認知は運動学習の特性に集中していることを明らかとした。さらに、民間スポーツクラブにおけるマネジメント方法を再考のためロイヤルティの程度から会員を類型化した中西・八代(1991)は、類型化の作業により「流行」「達成」「健康」「個性化」「スポーツ」「自己確信」が抽出され、体育・スポーツ分野でもライフスタイルが多面的で多次元な構造であることを明らかとしている。小野里ら(2013)の、生活満足を構成する要因を整理し概念の構造化をした研究では、「生活」「環境」「土着性」「地域コミュニティ」「文化」「スポーツ」で構成されており、「人々の多様な生活状況や価値観も考慮し、それらの付加価値を具現化してよりきめ細やかな需要に対応していくことが必要である」と指摘している。このように、スポーツ行動に対し類型化を試み実態を詳細に把握していくことは大いに期待される。さらに、人々の生活様式の視点から研究している井澤・松永(2015)は、総合型地域スポーツクラブのマーケティング戦略の立案に向けた研究において、「気晴らし」「休息」「交流」「自己実現」「健康」「家族」の6因子が採用された。同尺度を援用して公共スポーツ施設利用者の生活様式を明らかとした阿部(2021)の研究では、「休息」「交友関係」「充実感」「体力・健康」「家族」「ストレス解消」の6因子が抽出されている。これらのことからスポーツ行動の研究尚且つスポーツ施設のマネジメント手法の検討に着手するうえでは多様化する現代社会の中において、施設利用者のスポーツ行動に対し構造化を試み特性を整理し、詳細を捉える必要性が挙げられる。

小野里ら(2013)は、消費者である運動者に着目したマーケティングのスポーツサービスを検討し、生活満足に焦点をあて運動者研究を行っている。さらに中西(1995)は、利用者側の期待をどのようにコントロールしていくかがサービス・マネジメントを検討する場合に重要な要素と指摘している。これらのことから、

スポーツ施設のマネジメント法を検討していくためには、利用者から捉えることが重要であると示唆される。地域スポーツ振興のためにスポーツ行動の発現に焦点をあて人々とスポーツとの関係について研究した長岡・赤松(1998)は、運動・スポーツを行う目的を因子分析した結果「楽しさ因子」「精神的健康因子」「身体的健康因子」「社会的健康因子」の4因子を抽出し、「デモグラフィック要因とベネフィット要因を組み合わせることによって区分されたセグメントによって、より実践的なセグメンテーションを提示していくことが可能となる」と指摘している。スポーツ行動を分析しようとする場合、活動を生起させ、成立させる要因に何を指定するかが問題となる(荒井・松田, 1977)と述べられていることから、本研究も属性の観点から比較検討を実施する。さらに、スポーツクラブの新規会員を対象に、スポーツ参加者のライフスタイルに関する研究を実施した原田・菊池(1990)は、30代は男女とも健康管理の意識が低く、体力や運動能力に自信を失う傾向が強く、40代になると健康管理に気をつかうようになり、50代以上は得られた7つの因子が40代とよく似たパターンを示していると指摘している。本研究においても、年代については30代以下と40代以上に焦点を当て、分析を行う。

以上のことから、本研究では公共スポーツ施設利用者のスポーツ行動の構造化を試みた。さらに、スポーツ行動は属性によって変化が生じるのか検証するため属性比較を実施しスポーツ施設マネジメント手法の一助を目指すことを目的とした。

## 2. 研究方法

### 2.1 調査対象者

本調査は、2019年9月4、5、7、8、11、12、14、15日の平日4日間、休日4日間の計8日間<sup>註1)</sup>で実施した。調査対象施設は、財団により2006年に指定管理者が導入され指定管理者外部評価AAA認定を受けている東京都の公共スポーツ施設である。財団により運営されているトレーニングルーム2か所・温水プール2か所・ゴルフ練習場を対象とした。各施設の年間利用人数はトレーニングルーム70,416/53,595名、温水プール320,890/235,486名、ゴルフ練習場193,763名である。当該施設で滞りなく調査を実施するために施設利用後1人1人に対して調査員が声掛けし質問紙調査の協力を得て実施した。そのため、調査用紙の配布・回収場所は、施設利用者が必ず通る出入口付近に設けた。配布方法は、調査対象者の施設利用後に調査員が調査概要を説明し、調査用紙を配布した。その後、調査員がその場で調査用紙を回収した。尚、調査実施期間に数回施設利用をしている調査対象者は1度だけの回答

としている。その結果、配布数が1156枚であり回収したアンケート用紙を精査し、誤答や書き漏らしのあったアンケート用紙を分析対象から除外した結果、有効回答数396枚、有効回答率29.1%であった<sup>注2)</sup>。

## 2.2 調査項目

### 2.2.1 基本的属性

調査対象者の基本的属性は、「性別」「年代」「利用目的」を設定した。尚、利用目的に関しては、「健康・体力づくり」「楽しみ・気晴らし」「運動不足の解消」「友人・仲間との交流」「美容や肥満の解消」「家族とのふれあい」「精神修養」「自己の記録や能力の向上」8項目を設定し複数回答で求めた。

### 2.2.2 スポーツ行動尺度

調査項目は、中西・八代（1991）と小野里ら（2013）で用いられた尺度を援用し、59項目を設定した。また、これらの項目に対し「非常にあてはまる…5」「あてはまる…4」「どちらでもない…3」「あてはまらない…2」「全くあてはまらない…1」の5件法で回答を求めた。

## 2.3 分析方法

本調査の統計処理はSPSS Statistics 25を用いて行い、有意水準は5%未満とした。

### 2.3.1 単純集計

調査により得られた結果について、「調査対象者の性別」「調査対象者の年代」「調査対象者の施設利用目的」について単純集計を行った。利用目的に関しては「健康・体力づくり」「楽しみ・気晴らし」「運動不足の解消」「友人・仲間との交流」「美容や肥満の解消」「家族とのふれあい」「精神修養」「自己の記録や能力の向上」の8項目である。

### 2.3.2 t検定

属性別にスポーツ行動要因を明らかにするため、t検定による属性比較を行った。属性による比較対象は、「男性」と「女性」、「30代以下」と「40代以上」であった。

### 2.3.3 探索的因子分析

スポーツ行動の項目に対し、最尤法・Promax回転による探索的因子分析を試み、削除する項目の基準値は因子負荷量 $>0.500$ とした。抽出された因子に対しては、Cronbachの $\alpha$ 係数による信頼性の検証を行い、基準値は $\alpha$ 係数 $>0.70$ とした（小塩，2018）。

## 3. 結果

### 3.1 調査対象者の属性

表1は、調査対象者の属性について示した結果である。「男性」72.0%、「女性」28.0%という結果であった。年代は「10代」3.7%、「20代」10.8%、「30代」10.8%、「40代」26.5%、「50代」18.6%、「60代」16.9%、「70代」10.8%、「80代」1.2%、「90代」0.2%という結果であった。

### 3.2 調査対象者の施設利用目的

表2は、調査対象者の施設利用目的について示した結果である。「健康・体力づくり」34.3%、「楽しみ・気晴らし」16.3%、「運動不足の解消」25.6%、「友人・仲間との交流」2.3%、「美容や肥満の解消」8.4%、「家族とのふれあい」6.6%、「精神修養」2.0%、「自己の記録や能力の向上」4.6%という結果であった。尚、施設利用目的については複数回答にて得られた結果である。

### 3.3 探索的因子分析

まず初めに、スポーツ行動59項目に対し、探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。因子

表1 調査対象者の基本的属性

項目		度数	%
性別	男性	285	72.0
	女性	111	28.0
年代	10代	15	3.7
	20代	43	10.8
	30代	43	10.8
	40代	105	26.5
	50代	74	18.6
	60代	67	16.9
	70代	43	10.8
	80代	5	1.2
90代	1	0.2	

表2 調査対象者の利用目的

項目	度数	%
健康・体力づくり	311	34.3
楽しみ・気晴らし	148	16.3
運動不足の解消	232	25.6
友人・仲間との交流	21	2.3
美容や肥満の解消	76	8.4
家族とのふれあい	60	6.6
精神修養	18	2.0
自己の記録や能力の向上	42	4.6
合計	908	100

※複数回答

の負荷量は信頼性を保つため、.500 以上を一定値とし、項目の削除を行った。因子分析の結果、スクリープロットの傾向から 5 因子を抽出し、各因子に対する負荷量が .500 未満の項目を削除した結果、26 項目が削除され 33 項目 5 因子となった。

第 1 因子 ( $\alpha=.896$ ) は、「おしゃれをするのが好き」「ファッションを重視する」「流行りを取り入れるのは楽しい」「服装は流行」「流行を取り入れ自分の個性を

発揮できる」「ファッションのためにお金や時間は惜しまない」「流行についての記事や話しに関心」「買い物が好き」「目立つものを買う」の 9 項目で構成され、ファッションや流行という項目を表す内容であることから「流行志向」と名付けた。第 2 因子 ( $\alpha=.873$ ) は、「この地域の生活は楽しい」「この地域は住みやすい」「この地域は運動・スポーツがしやすい」「この地域は色々な人が支援してくれる」「この地域の伝統や文化が

表 3 探索的因子分析結果

因子項目	1	2	3	4	5
<b>【流行志向】</b>					
おしゃれをするのが好き	0.815	-0.069	-0.065	-0.032	0.166
ファッションを重視する	0.804	0.082	-0.105	0.097	-0.121
流行りを取り入れるのは楽しい	0.803	-0.102	-0.007	-0.019	0.220
服装は流行	0.751	0.062	0.004	-0.019	-0.094
流行を取り入れ自分の個性を発揮できる	0.704	0.086	0.102	0.040	-0.010
ファッションのためにお金や時間は惜しまない	0.659	0.044	0.047	-0.029	-0.104
流行についての記事や話しに関心	0.652	-0.100	0.051	-0.110	0.214
買い物が好き	0.590	-0.051	0.012	-0.092	0.029
目立つものを買う	0.536	0.011	0.004	0.194	-0.131
<b>【地域生活満足】</b>					
この地域の生活は楽しい	0.023	0.839	-0.088	-0.004	0.054
この地域は住みやすい	-0.035	0.689	-0.030	-0.079	0.162
この地域は運動・スポーツがしやすい	-0.051	0.677	0.004	-0.092	0.149
この地域は色々な人が支援してくれる	0.054	0.624	0.061	-0.004	-0.163
この地域の伝統や文化が好き	0.177	0.606	-0.011	-0.046	-0.218
この地域は便利である	-0.072	0.599	-0.012	-0.065	0.197
生活に満足している	-0.041	0.594	0.064	0.029	-0.027
この地域が好き	-0.076	0.585	0.059	0.054	0.231
毎日よく眠れる	-0.004	0.555	-0.006	-0.010	0.023
熱中できるものがある	0.006	0.532	0.010	0.202	0.065
<b>【みるスポーツ】</b>					
TV・ラジオのスポーツ番組をよく見る	-0.036	-0.116	0.852	-0.049	0.103
中継でスポーツを観戦する	-0.048	0.061	0.846	-0.129	0.034
現地でスポーツ観戦	-0.056	-0.065	0.721	0.097	0.109
新聞（一般紙）のスポーツ欄をよく読む	-0.078	0.085	0.711	-0.021	-0.214
雑誌・週刊誌のスポーツ欄をよく見る	0.153	-0.109	0.698	0.000	0.066
スポーツや趣味をいくらでも話せる	-0.040	0.030	0.643	0.164	0.185
大会行事の観戦応援をする	0.154	0.098	0.604	-0.036	-0.116
スポーツ新聞をよく読む	0.058	0.093	0.548	0.062	-0.248
<b>【個性化】</b>					
個性的な生き方	-0.009	-0.040	-0.040	0.856	0.077
平均的日本人と違う生き方	-0.073	0.071	0.013	0.695	-0.101
みんなと同じ生活をするのは面白くない	0.041	-0.087	0.040	0.626	0.115
<b>【運動・スポーツ継続】</b>					
健康維持に欠かせない	0.060	0.063	-0.027	0.077	0.649
運動・スポーツを定期的に続ける	0.048	0.119	0.055	-0.048	0.639
スポーツ施設を継続して利用したい	0.029	0.267	-0.055	0.066	0.553
因子相関行列					
2	0.189	1	-	-	-
3	0.358	0.243	1	-	-
4	0.259	0.291	0.281	1	-
5	-0.016	0.337	0.076	0.018	1

表4 因子得点

因子名	第1因子 流行志向	第2因子 地域生活満足	第3因子 みるスポーツ	第4因子 個性化	第5因子 運動・スポーツ継続
<i>M</i>	2.92	3.73	2.95	3.22	4.26
<i>SD</i>	0.76	0.58	0.88	0.83	0.57

好き」「この地域は便利である」「生活に満足している」「この地域が好き」「毎日よく眠れる」「熱中できるものがある」の10項目で構成され、地域の生活に関する項目を表す内容であることから「地域生活満足」と名付けた。第3因子 ( $\alpha=.891$ ) は、「TV・ラジオのスポーツ番組をよく見る」「中継でスポーツを観戦する」「現地でスポーツを観戦する」「新聞(一般紙)のスポーツ欄をよく読む」「雑誌・週刊誌のスポーツ欄をよく見る」「スポーツや趣味をいくらでも話せる」「大会行事の観戦応援をする」「スポーツ新聞をよく読む」の8項目で構成され、スポーツを見ることや観戦に関する項目を表す内容であることから「みるスポーツ」と名付けた。第4因子 ( $\alpha=.758$ ) は、「個性的な生き方」「平均的日本人と違う生き方」「みんなと同じ生活をするのは面白くない」の3項目で構成され、個性的な生き方や生活に関する項目を表す内容であることから「個性化」と名付けた。第5因子 ( $\alpha=.747$ ) は、「健康維持に欠かせない」「運動・スポーツを定期的に続ける」「スポーツ施設を継続して利用したい」の3項目で構成され、健康維持や運動・スポーツの継続性に関する項目で表す内容であることから「運動・スポーツ継続」と名付けた。

以上の5因子に対し、Cronbachの $\alpha$ 係数を用いて信頼性を検証したところ、すべての因子において基準値 ( $\geq .70$ ) 満たすことができた(第1因子: .896, 第2因子: .873, 第3因子: .891, 第4因子: .758, 第5因子: .747)。したがって、33項目5因子(表3)において尺度の信頼性が確認された。

### 3.4 因子得点

表4は、因子得点の平均値を示した結果である。第1因子「流行志向」2.29, 第2因子「地域生活満足」3.73, 第3因子「みるスポーツ」2.95, 第4因子「個性化」3.22, 第5因子「運動・スポーツ継続」4.26という結果であった。

### 3.5 因子と属性比較

#### 3.5.1 性別

表5は、5因子を「性別」で比較した結果である。「みるスポーツ」「個性化」は、「男性」の方が平均値が高くなり「女性」より有意に高い値を示した。

表5 スポーツ行動因子と性別の比較

項目	男性		女性		<i>t</i> 値
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
流行志向	2.89	0.74	3.00	0.78	1.25
地域生活満足	3.70	0.60	3.80	0.53	1.44
みるスポーツ	3.03	0.85	2.77	0.94	2.59*
個性化	3.31	0.77	2.99	0.94	3.20**
運動・スポーツ継続	4.25	0.59	4.29	0.52	0.72

\*\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

表6 スポーツ行動因子と年代の比較

項目	30代以下		40代以上		<i>t</i> 値
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
流行志向	2.99	0.81	2.90	0.74	1.10
地域生活満足	3.78	0.60	3.71	0.58	1.00
みるスポーツ	2.80	1.00	3.01	0.83	1.92
個性化	3.38	0.95	3.16	0.78	2.13*
運動・スポーツ継続	4.26	0.56	4.26	0.58	0.02

\* $p<.05$

### 3.5.2 年代

表6は、5因子を「年代」で比較した結果である。「個性化」は、「30代以下」の方が平均値が高くなり「40代以上」より有意に高い値を示した。

## 4. 考察

本研究は、公共スポーツ施設利用者のスポーツ行動の構造化を試み、スポーツ行動は属性によって変化が生じるのか検証するため属性比較を実施しスポーツ施設マネジメント手法の一助を目指すことを目的とした。

### 4.1 本調査対象者のスポーツ行動の特性

本調査対象者がスポーツ施設を利用する目的の上位項目は「健康・体力づくり」次いで「運動不足の解消」、「楽しみ・気晴らし」であることが示された。最も数値が低かったのは、「精神修養」次いで「友人・仲間との交流」となり、「自己の記録や能力の向上」、「家族とのふれあい」は共に低い結果であった。この結果は、スポーツ施設の利用目的を単純集計でまとめている先行研究(阿部ら, 2021; 神野ら, 2009; 石井・石川, 2000)とほぼ同様であり、多くの利用者が健康・体力づくり、運動不足の解消を目的とすることで運動やスポーツに

対する楽しさを得ていると考えられる。一方で、家族や友人・仲間での活動やスポーツを行うことによる精神の修養はスポーツ施設を利用する目的としている傾向が少ないことが確認できた。

次に、因子分析の結果から特性を検討した。本研究での因子分析の結果、「流行志向」「地域生活満足」「みるスポーツ」「個性化」「運動・スポーツ継続」の5因子が抽出され、大きくわけて運動・スポーツに関すること、地域に関すること、流行や個性的生き方に関することに構造化されていることが確認できた。民間スポーツクラブ会員に着目した研究（中西・八代，1991）で抽出された因子は、「流行」「達成」「健康」「個性化」「スポーツ」「自己確信」の6因子が抽出され、体育・スポーツ分野でのライフスタイルが多面的で多次元であることが指摘されている。小野里ら（2013）の研究では、「生活」「環境」「土着性」「地域コミュニティ」「文化」「スポーツ」の要因が人々の生活満足を構成しているとし「スポーツは人間すべての生活現象の中の文化的生活の一部であり、人々がスポーツに親しむことや個人の生活においてスポーツと多様に関わることが人々の生活満足に効果的に機能する」と述べている。このように、スポーツ行動は多面的でありスポーツとの多様な関わりから生活満足やストレス解消に対しても影響を与える。よって、体育・スポーツ分野のライフスタイルは多面的・多次元であり、スポーツと多様に関わることで生活面にも影響を与えていることが示唆される。

運動・スポーツに関しては、「運動・スポーツ継続」因子の平均値が最も高く、本調査対象者はスポーツ施設を利用しており、健康維持や運動・スポーツを継続するための手段とし施設を利用することを目的にしていることが確認できた。また、本研究では「みるスポーツ」因子も抽出されており、平均値も中央値を超えていることから、スポーツ施設利用者はスポーツに関する情報を求める傾向がある。このように、スポーツ施設を利用することで、する・みるスポーツの両面から運動・スポーツへの関わりが生じていることが示唆される。よって、スポーツ施設利用者へスポーツ観戦情報やチケット販売の仲介等、様々な情報を提供することも施設マネジメントを検討する際の一案になるのではないかと考えられる。さらに、運動・スポーツの習慣化・継続化に関して調査した小原・松下（2015）は、手軽に使える小規模な施設がある、時間や経済的ゆとりがある、手軽に楽しめるスポーツの普及は年代や性別間で共通して習慣的・継続的に実施する際の必要条件であると述べている。このことから、健康維持のためスポーツ施設を継続的に利用でき、定期的にスポーツを続けることのできるよう手軽に楽しめるスポーツの提案が

重要になるのではないかと考えられる。

地域に関しては、この地域の生活は楽しい、住みやすい、色々な人が支援してくれる、伝統や文化が好き、便利である、運動・スポーツがしやすいなど地域での生活に満足しているという項目が抽出されている。生活満足と関連する要因として、地域への愛着等を意味する土着性や地域コミュニティが人々の生活満足を構成するもの（小野里，2013）とされており、スポーツ施設を利用していることで生活満足を得ると同時に地域に対しての愛着が生まれる傾向が示された。さらに、地域は運動・スポーツがしやすいという項目が抽出されていることから地域にスポーツが根付きスポーツ行動を生起させていると推察できる。地域に対して愛着しスポーツが根付いていることから、地方自治体と連携し、地域貢献活動の斡旋も効果的であろう。

流行や個性的生き方に関しては、本調査で抽出された「個性化」因子は中西・八代（1991）の研究にて抽出された「個性化」因子と同様の項目が抽出されている。この個性化因子は他の人とは違った生活の仕方や個性的な生き方を重視する傾向に強く、本研究においても類似している結果が確認できた。また「流行志向」因子は、因子得点の中で最も低い平均値を示しているが中央値以上の値であった。流行やファッションについての関心があり、その流行やファッションについては調査項目から具体的な情報まで言及できないが、最新の機器導入やファッション性に富んだ商品を並べることも施設マネジメントの観点から必要になるのではないかと考えられる。

#### 4.2 スポーツ行動と属性の関連性

スポーツ行動因子と性別を比較した結果では、男性が女性より「みるスポーツ」「個性化」の因子において有意に高い値を示し、年代と比較した結果、30代以下の方が40代以上より「個性化」因子において有意に高い値を示した。これらの結果から男性は「みるスポーツ」、尚且つ30代以下の男性が「個性化」という行動に当てはまることが確認できる。みるスポーツは、伝統的なスポーツ群を愛好する「Pタイプ」、サッカーを愛好する「Jタイプ」、開放的なスポーツを好む「Wタイプ」の3つにパターンが抽出されスポーツ種目によって明確に異なることを明らかとしている。さらに、同じ系統の種目のジョイント開催や連携したプロモーション活動の可能性など、客層に注目した有効なマーケティングの可能性を示唆している（畑・小野里，2017）。このように、みるスポーツについての特徴が明らかにされ施設マネジメントに繋がる有効な手立てが示されている。しかしながら、本調査においては、実施しているスポーツも日頃より観ているスポーツ種目

も調査していない。今後の検討事項とし、する・みるスポーツの実施種目という観点からもスポーツ行動を明らかとし、する・みるとのジョイントするマネジメントの方法の検討が必要となる。また、30代以下の男性に関しては、生き方や生活様式について個性的な考えを持つ傾向があることから、この層に対して新たなスポーツ現象の追求は今後欠かせないものであることが示唆される。

## 5. まとめと今後の課題

本研究は、公共スポーツ施設利用者のスポーツ行動の構造化を試みた。さらに、スポーツ行動は属性によって変化が生じるのか検証するため属性比較を実施しスポーツ施設マネジメント手法の一助を目指すことを目的とした。

本研究で明らかとなったことは以下に集約される。

- (1) スポーツ施設利用者のスポーツ行動について因子分析した結果、「流行志向」「地域生活満足」「みるスポーツ」「個性化」「運動・スポーツ継続」の5因子が抽出された。
- (2) 因子得点で最も高い値を示したのは、「運動・スポーツ継続」であり、次いで「地域生活満足」であった。最も低い値を示したのは「流行志向」であった。
- (3) 因子と性別を比較した結果、「男性」が「女性」より「みるスポーツ」「個性化」の因子において有意に高い値を示した。
- (4) 因子と年代を比較した結果、「30代以下」が「40代以上」より「個性化」の因子において有意に高い値を示した。
- (5) スポーツ施設を利用する目的は、「体力・健康づくり」「運動不足の解消」「楽しみ・気晴らし」「美容や肥満の解消」「家族とのふれあい」「自己の記録や能力の向上」「友人・仲間との交流」「精神修養」の順に高い値を示した。

本研究の結果から調査対象者の多くは、健康・体力づくり、運動不足の解消を目的とすることで運動やスポーツに対する楽しさを得ていた。また、大きくわけて運動・スポーツに関すること、地域に関すること、流行や個性的生き方に関することの3つに構造化された。

スポーツ行動の成立・維持・発展に貢献していくためには、スポーツ生活を充実させることが必要とされている。そのため今後の課題として本研究で実施したスポーツ施設マネジメント手法の検討に加え、より詳細な情報を探るためスポーツ施設の利用目的や施設の種別によるスポーツ行動の構造化に着目し、新たな知見を得る必要性も示された。

## 注

- 注1) 調査期間は、平日と休日共に4日間の計8日間で実施した。また、各施設の開閉時間は、2か所の温水プールが9:00～21:00、トレーニングルーム2か所が9:00～22:00、ゴルフ練習場が9:00～22:00(冬季の開閉時間は変動)である。尚、本調査の調査時間は、施設を管理する財団との相談のもと、各施設の調査可能な10:00～17:00の7時間を設定した。
- 注2) 回収枚数と有効回答数に差が生じている要因とし、調査用紙配布は施設利用後におこなっており、帰宅間近の利用者ということもあり誤答や書き漏らしが多かったことが考えられる。また、駐車場を利用している対象者も多く、時間超過すると追加料金が発生してしまう可能性が生じ、その点も踏まえ今後検討していく。

## 文 献

- 阿部征大・清宮孝文・依田充代・日比野幹生(2021)公共スポーツ施設利用者のライフスタイル構造に関する研究:東京都A区の公共スポーツ施設に着目して. *運動とスポーツの科学*, 26(2): 149-160.
- 秋吉遼子・山口康雄(2013)公共スポーツ施設におけるサービス・クオリティ, 利用者満足, 及び行動意図の関連性に関する実証的研究. *神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要*, 6(2): 1-10.
- 天野和彦(2005)公共スポーツ施設の管理に関する研究—指定管理者制度の導入に向けて—. *東亜大学紀要*, 4: 51-59.
- 荒井貞光・松田泰定(1977)スポーツ行動に関する実証的研究(2). *体育学研究*, 22(3): 137-152.
- 福田一儀・住田健・岡崎祐介(2015)公共スポーツ施設の指定管理者に新たな団体が加わったことによる利用者のサービス評価と満足度の変化について. *至誠館大学研究紀要*, 2: 51-58.
- 後藤貴浩(2008)公共スポーツ施設における指定管理者制度の社会学的意味. *熊本大学教育学部紀要*, 57: 219-228.
- 畑攻・小野里真弓(2017)基本スポーツマネジメント. 大修館書店: 東京.
- 畑攻・宇土正彦・八代勉(1984)運動・スポーツ行動に対する運動者の主体的条件の類型化に関する研究. *筑波大学体育科学紀要*, 7: 11-19.
- 原田宗彦・菊池秀夫(1990)スポーツ参加者のライフスタイルに関する研究. *体育学研究*, 35: 241-251.
- 細江文利(1982)運動行動の類縁性からみた地域スポーツ活動の類型化の試み: 特に研究のフレームワークの構築を中心として. *東京学芸大学紀要*, 第5部門, 芸術・体育, 34: 175-182.
- 石井康宏・石川旦(2000)スポーツ施設の活用状況と活用促進課題—公共温水プール施設について. *仙台大学大学院スポーツ科学研究科研究論文集*, 1: 1-7.
- 井澤悠樹, 松永敬子(2015)総合型地域スポーツクラブのマーケティング戦略に関する基礎的研究—既存会員の理解に向けたライフスタイル構造の把握—. *東海学園大学紀要*, 20: 1-12.
- 神野賢治・田島良輝・井上明浩(2009)公共スポーツサービスの利用者に関する研究—利用者の特性と満足度

- に着目して一. 金沢星稜大学人間科学研究, 2(2): 53-61.
- 北見好・佐野昌行・久木田謙介・富田幸博 (2011) 公共スポーツ施設に対する満足度に影響を与える要因—世田谷区公共温水プールの調査から—. 日本体育大学紀要, 41(1): 101-110.
- 小塩真司 (2018) SPSS と Amos による心理・調査データ解析—因子分析・共分散構造分析まで—. 東京図書: 東京.
- 松下宗洋・原田和弘・荒尾孝 (2014) 運動行動の動機づけに効果的なインセンティブ. 日本健康教育学会誌, 22(1): 30-38.
- 文部科学省 (2013) スポーツ基本法 (平成 23 年法律第 78 号) (条文). [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/kihonhou/attach/1307658.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/attach/1307658.htm) (参照日 2021 年 2 月 24 日)
- 文部科学省 (2017) スポーツ基本計画, スポーツ基本計画 (本文). [https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656\\_002.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656_002.pdf) (参照日 2021 年 2 月 24 日)
- 長岡雅美・赤松喜久 (1998) 地域住民のスポーツ行動の特定化に関する基礎的研究—Y 市における市民を対象とする調査結果より—. 大阪教育大学紀要第 IV 分野, 46(2): 207-219.
- 中比呂志・出村慎一・長澤吉則・山下秋二 (1993) 公共スポーツ施設に対する利用者の満足及び要望に関する研究. 体育・スポーツ学研究, 10(1): 29-42.
- 中西純司 (1995) 公共スポーツ施設におけるサービス・クオリティの構造に関する研究. 福岡教育大学紀要, 44(5): 63-76.
- 中西純司・八代勉 (1991) 民間スポーツクラブにおけるクラブ・マネジメントの方法論的課題—特にブランドロイヤルティマネジメントとマーケティング戦略の視点から—. 筑波大学体育科学系紀要, 14: 21-37.
- 中澤篤史 (2006) 公共スポーツ施設の〈常連〉とはどのような人たちなのか—横浜市における質問紙調査結果の分析を通して—. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 46: 359-370.
- 小原史朗・松下智之 (2015) 運動・スポーツの習慣化・継続化に関する調査研究. 愛知工業大学研究報告, 50: 58-70.
- 小野里真弓・畑攻・木戸直美・小山さなえ (2013) 生活満足からみたスポーツサービスの検討. 日本女子体育大学紀要, 43: 11-20.
- 笹川スポーツ財団 (2018) スポーツ・ライフ・データ 2018—スポーツライフに関する調査報告書—. 笹川スポーツ財団: 東京.
- スポーツ庁 (2018) 平成 30 年度体育・スポーツ施設現状調査結果の概要. [https://www.mext.go.jp/sports/content/20200422-spt\\_stiiki-1368165.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/content/20200422-spt_stiiki-1368165.pdf) (参照日 2021 年 2 月 24 日)
- スポーツ庁 (2018) スポーツ実施率向上のための行動計画—「スポーツ・イン・ライフ」を目指して—. [https://www.mext.go.jp/prev\\_sports/comp/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afiedfile/2018/10/02/1408815\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2018/10/02/1408815_01.pdf) (参照日 2021 年 2 月 24 日)
- 八代勉・宇土正彦・畑攻・柳沢和雄 (1981) 運動者行動に関する研究—特に, スポーツに対する購買意識の分析を中心として—. 筑波大学体育科学紀要, 4: 29-39.
- 八代勉・中村平 (2002) 体育・スポーツ経営学講義. 大修館書店: 東京.

---

**<連絡先>**

著者名: 阿部征大  
住 所: 東京都世田谷区深沢 7-1-1  
所 属: 日本体育大学博士後期課程  
E-mail アドレス: 19pda02@nittai.ac.jp